

氏 名	中尾 泰斗
学位の種類	博士（芸術学）
学位記番号	博甲第 7827 号
学位授与年月	平成 28 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	堂本印象の抽象表現における線描の特質

主 査	筑波大学教授	博士（芸術学）	太田 圭
副 査	筑波大学教授		藤田 志朗
副 査	筑波大学教授	博士（芸術学）	仏山 輝美
副 査	高知大学講師	博士（芸術学）	野角 孝一

## 論文の内容の要旨

### （目的）

本論文は、堂本印象(1891-1975)の抽象表現における線描の考察からその特質を明らかにし、日本画制作者でもある著者の作品制作に反映させることを総合的な目的としている。研究の背景とした先行研究では、その多くが堂本の「多様な制作スタイルの展開」に関するもので、抽象表現における「線」に特化した分析および考察はやや不十分であると考えられる点があり、堂本の画家としての全体像の把握としては不備を感じざるを得なかった。そこで本論文では、堂本の抽象表現に見られる「線」に焦点を当て、技法と材料両面に基づく実験制作を通し、堂本の線の特徴を実証的に検討することを目的としている。そして、本研究を通して得ることができた「線」に対する意識を、著者の制作および新しい時代にどのように活かして行くかを追究したいとしている。

### （対象と方法）

本論文は堂本印象に関する先行研究および関連諸資料の調査検討を踏まえつつ、堂本印象の抽象表現における線描に着目して進められている。その方法は大きく 2 つに分けることができる。一つは堂本印象の作品考察も含む資料調査と分析（第 1 章から第 3 章）で、もう一つは堂本作品の考察に基づく実験制作を含んだ実証的な調査と分析（第 4 章と第 5 章）である。

序章では、資料をもとに日本絵画における「線」の定義付けを行い、研究の背景、先行研究、本研究の目的と意義、構成などを述べた。

第 1 章では、堂本印象の略歴調査を主に、戦後の日本画界の状況の分析、同時代の諸作家との比較検

討を展開した。

第2章では、堂本印象の辿ってきた日本画の学習歴を詳細に調査し、その後の抽象表現に転化した要因と展開との関わりを調査分析した。

第3章では、諸資料をもとに、欧州視察に焦点をあてて、堂本の抽象表現との影響関係について分析した。併せて当時の日本画界における抽象表現との関わりや堂本の抽象表現に対する思想について言及した。

第4章では、堂本の作品に用いられている線に見られる諸技法（金箔の使用やマチエール、濃淡の表現方法、余白の表現、空間表現）について具体的に作品の考察結果を示し、自らの実験制作を通して論考を展開した。

第5章では、本研究で得た知見を自らの作品に反映させた制作のプロセスを示し考察した。

終章では、各章の総括をし、本論文の結論を示した上で、今後の課題と研究の展開をまとめている。

### （結果）

本論第1章では、堂本の抽象表現の根底には、京都で日本画の専門教育を受けたことがあるとし、詳細な考察により様々な表現方法を展開した背景を示しつつ、同次代の日本画家との相違点を明らかにし、堂本の独自性を明らかにすることができた。

続く第2章では、まず堂本が日本絵画から何をどのように受容してきたかを追究した。そしてその後制作された抽象作品の「題名」を分析および分類し、その傾向を明らかにするとともに、堂本の抽象表現に関わる思考の論拠を明らかにした。

第3章では、堂本の抽象表現への転換の契機に2度の欧州視察旅行があるとし、西洋美術からの受容状況とその根拠について具体的に述べ、抽象表現に展開していった思想的背景を明らかにした。

第4章では堂本作品に見られる線の表現方法について実験制作を通して、その構造の分析と考察を展開した。とりわけ堂本の抽象表現に見られる金箔やマチエール、濃淡による表現などに堂本の独自性を見出した。

そして第5章では、本研究で得た知見をもとにした筆者の日本画作品への反映例を示した。筆者は普段は具象表現を主としているのであるが、自らが抽象表現を用いた作品制作を試みた。

以上の考察および実験制作から得た知見に基づき、終章において、研究の概括と結論をまとめ、今後の作品制作に向けて有効な結論を得ることができたと結んでいる。

### （考察）

本研究は、大きく2つの研究方法に基づき、「独自性のある堂本印象の線の特質」に関して、作品を制作する著者ならではの結論を求めた研究になっている。

第1章では、堂本印象の略歴調査を主として、戦後の日本画界の実情の分析、同時代の諸作家との比較検討を展開した。その結果、堂本印象の画家としての独自性を明らかにすることができた。ただし戦後に興ったパンリアル美術協会の画家とその他の画家の動向についての考察が浅くなった感があるのは否めず、比較対象とした日本画家についての考察とともに、やや偏重してしまったのは惜しまれる。

第2章では、堂本印象の辿ってきた学習歴を調査し、抽象表現との関わりを分析した。その中で作品の題名を分類したことは筆者の創造性を認めることができる。その結果、堂本印象の抽象作品の分類と傾向を把握することができた。

第3章では、諸資料をもとに、堂本印象の欧州視察に焦点をあてて、その影響関係について分析を展

開した。とりわけ当時の抽象表現の背景と堂本の影響関係を考察し、堂本の抽象表現に対する思想的根拠と背景について論考した。ただし抽象表現を行った欧米の画家との関係が理解しにくいこと、当時の日本画界の作家の状況把握の不十分さが残念であった。しかし、堂本の著した書物などに見られる言葉を丁寧に分析した結果、欧州視察と堂本の抽象表現への影響と展開についての因果関係を明らかにすることができた。

第4章では、これまでの考察に基づき、制作者でもある筆者の実験制作を踏まえた考察が展開された。とりわけ堂本印象の作品に用いられている「線」の解釈には、著者の独特な解釈を感じたが、金箔の使用やマチエール、濃淡の表現方法、余白の表現、空間表現について、丁寧に実験制作を行った。その結果、制作者としての著者による堂本作品の制作方法の一部を明らかにすることができた。

第5章では、本研究で得た緒知見に基づき、著者の具象的作品に反映させた制作プロセスと、再現的な抽象表現の作品についてそれぞれ分析している。その結果、堂本の抽象表現に見られる「線描」の定義や意図がより明瞭になった。

終章では、各章の総括をし、本論文の結論を示した上で、今後の課題と研究の展開をまとめている。

## 審査の結果の要旨

### (批評)

本論文は、日本画制作者でもある著者が、日本絵画における「線」に関心を持ったことを契機に、具象表現のみならず抽象表現も手がけてきた日本画家の堂本印象の「線」について論考を試み、その造形上の独自性を明らかにし、その研究成果を自らの制作活動につなげることを目的としたものである。その結果導きだされた結論の評価を下記にまとめた。

1. これまでの堂本印象の作家研究においては、作品スタイルの変化と展開が中心になされており、それらの底流にある「線」についての論考は十分であったとは言えないと指摘した上で、その点を補充すべく、先行研究等の貴重な資料を活用しながら数多くの資料に基づき、丁寧な考察を繰り返し、実験制作を繰り返した。その結果、堂本印象の辿ってきた様々な表現上の工夫と線の独自性を明らかにしたという点は高く評価できる。
2. 筆者が論文中で用いた「線」の定義について、第4章で述べられている実験制作を通して示された金箔との関係については、その解釈と説明がやや不十分である、また文章的に冗長で感覚的すぎる箇所がある、などの問題点は本研究の学術的な価値を毀損するものではないと考える。

以上の通り、本研究は、「資料に基づく調査と考察」と「実験制作に基づく考察と分析」という2つの研究方法に基づき、日本画制作者としての視点を交えて結論を導きだしたもので、筆者の将来の研究に対してさらなる展開が期待されるものとなった。

平成28年1月18日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。よって、著者は博士（芸術学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。